

麻酔科、救急・災害対策室

I. 麻酔科と救急・災害対策室の紹介

越智が麻酔科Ⅱ長として赴任して 15 年目の年となりました。越智は 2018 年 3 月に定年退職を迎え、同年 4 月からは嘱託医（麻酔科Ⅱ長、救急科Ⅱ長、救急・災害対策室長）として勤務しています。

救急・災害対策室は 6 人のスタッフからなり、それぞれ他の部門と併任の形となっています。

【救急・災害対策室スタッフ】

- ・救急・災害対策室長 越智元郎 麻酔科Ⅱ長・救急科Ⅱ長（兼任）
（日本救急医学会指導医、日本麻酔科学会専門医、厚生労働省災害派遣医療チーム（DMAT）認定一統括 DMAT、日本救急医学会二次救命処置（ICLS）コースインストラクター、愛媛大学医学部臨床教授（麻酔・周術期学）、愛媛大学医学部非常勤講師（救急医学）、広島大学原爆放射線医科学研究所客員教授、愛媛大学防災情報研究センター客員教授、愛媛県災害拠点病院コーディネーター、八幡浜市災害医療コーディネーター、八幡浜市防災委員）
- ・室員 叶 恵美、外来検査副看護師長（兼任）
- ・室員 石見久美、外来副看護師長（兼任）
（災害支援ナース登録）
- ・室員 山本尚美、看護部副看護師長・医療安全管理者（兼任）
（厚生労働省災害派遣医療チーム（DMAT）認定、災害支援ナース登録）
- ・室員 川口久美 3 東病棟看護師（兼任）
（日本救急医学会二次救命処置（ICLS）コースインストラクター、厚生労働省災害派遣医療チーム（DMAT）認定、災害支援ナース登録）
- ・室員 脇本和敏 医療情報管理部医療情報システム係長（兼任）

II. 麻酔科・救急部の活動

a. 麻酔診療

2019 年度の麻酔科管理の手術件数は 339 件（前年度 408 件、以下同様）で前年度より 69 件（16.9%）減少しました。その全例が全身麻酔でした（前年度も同様）。診療科別の麻酔科管理症例数は外科 181 件（209 件）、整形外科 91 件（109 件）、泌尿器科 49 件（48 件）、耳鼻咽喉科 18 件（32 件）、脳神経外科 0 件（10 件）の順でした。科別内訳については外科、整形外科で減少していました。

なお麻酔科管理の手術 339 件のうち、緊急手術が 52 件（15.3%）、愛媛大学麻酔科医師担当が 98 件（28.9%）でした。各科医師担当の全身麻酔はありませんでした。

b. 麻酔科入院・外来診療実績

救急患者を中心とする当科のべ入院患者数は 75 人・日（前年度 25 人・日）、1 日当たり 0.20 人（同 0.07 人）で、前年より 0.13 人／日増加しています。平均在院日数は 8.8 日（3.2 日）でした。外来延患者数は 68 人（63 人）で、前年と比べ 5 人増加しています。

麻酔科で担当した年間救急患者数は47人(病院全体の1.6%)で、このうち帰宅が37人(同2.0%)、入院が10人(同1.0%)、外来死亡が4人(同7.3%)を占めていました。なお、前年度は麻酔科で担当した救急患者総数が43人(病院全体の1.4%)で、このうち帰宅が33人(同1.7%)、入院が10人(同0.9%)、外来死亡が3人(同4.3%)を占めていました。

c. 病院全体の救急診療統計 (別資料参照)

d. 教育研修

2019年度は研修医の麻酔救急研修はありませんでした。

救急救命士の研修としては、救急救命士養成学校入所中の病院実習を八幡浜消防の職員2人(前年度2人)に対し、のべ6当務及び2日勤、実習時間としてのべ時間160時間(前年度も同様)実施しました。また就業前病院実習を3人(前年度は2人)に対し、のべ63日(84日)実施しました。再教育病院実習をのべ25人(同15人)に対し、のべ25日(同15日)実施しました。

一方、気管挿管研修を八幡浜消防2人に、成功例としてのべ60例(前年度も同様)実施しました。ビデオ喉頭鏡実習は八幡浜消防10人、西予消防1人に対し、成功例として合計22症例実施しました(前年度はなし)。

III. 学会発表、誌上発表、講演など

a. 学会発表など

○第35回日本救急医学会中国四国地方会(2019年5月17日-18日、倉敷)

- ・電子メールおよび電話にLINE(R)を併用した緊急連絡網の運用訓練について
(二宮陽子、越智元郎、坂本利治、川口久美、石見久美、山本尚美、叶 恵美)
- ・2018年岡山・愛媛豪雨災害における自宅溺水に関する検討
(越智元郎)

○第21回日本災害看護学会年次大会(2019年9月5日、北見)

- ・津波浸水を念頭に置いた病院事業継続計画(BCP)-病棟業務の継続と職員の宿泊対策-
(川口久美、越智元郎、石見久美、叶 恵美、山本尚美、菊池幸恵)

○第25回災害医学会総会(2020年2月20日~22日、神戸)

・パネルディスカッション これでもいいのか、DMAT! : 原子力災害時の活動に関するDMAT隊員への意識調査より

(越智元郎、濱見 原、廣橋伸之、長谷川有史、島田二郎、森實岳史)

・パネルディスカッション これでもいいのか、原子力災害医療! : 入院患者等の避難は県災害医療対策部の重要な任務にはなり得ないか

(越智元郎)

・一般演題(口演): 津波浸水を想定した病棟業務の継続と職員の宿泊対策に対する病院事業継続計画(BCP)を用いた机上訓練

(川口久美、越智元郎、田澤 舞)

○水難学会総会 ういてまでセミナー1 国際交流会(2019年6月9日、東京)

- ・2018 年岡山・愛媛豪雨災害における自宅 溺水に関する検討
(越智元郎)

○第 36 回愛媛麻酔科集談総会 (2020 年 2 月 15 日、松山)

- ・愛媛県の推定心原性心停止傷病者の社会復帰率 (2008～2017) は全国第 46 位
(越智元郎)

b. 誌上発表・著書・新聞記事など

- ・巻頭言・2019 年水難学会学術総会に参加して
(越智元郎：ういてまで (社団法人水難学会機関誌) 第 14 巻 3 号 p. 1, 2019)
- ・巻頭言・後藤宏行著「死の海」に思うー著者が受けた水上安全教育、アジアの事情も併せてー
(越智元郎：ういてまで (社団法人水難学会機関誌) 第 15 巻 1 号 p. 1, 2020)
- ・医療機関の事業継続計画 (BCP) を地域全体から多角的に考える (講演記録)
(堀内義仁、越智元郎：八幡浜医師会報 通巻第 81 号 7-33、2019)
- ・伊方原発 30km 圏内からの入院患者避難シミュレーションー実入院患者および家族からの聞き取り調査をもとにー
(越智元郎、川口久美、石見久美、宮谷理恵：南予医学雑誌 19: 1-6、2020)
- ・自宅に洪水「ういてまで」(朝日新聞岡山地方版、2019. 8. 21)
- ・不意の浸水 浮いて助け待て (越智元郎、愛媛新聞投稿欄「門」、2019. 9. 10)
- ・八幡浜新聞に感謝申し上げます (越智元郎：八幡浜新聞 2019. 12. 2)

c. 講演・講義・講習会・訓練など

- ・越智元郎：愛媛大学医学部 2 年次講義：応急処置ー災害医学事始め、2019 年 6 月 14 日

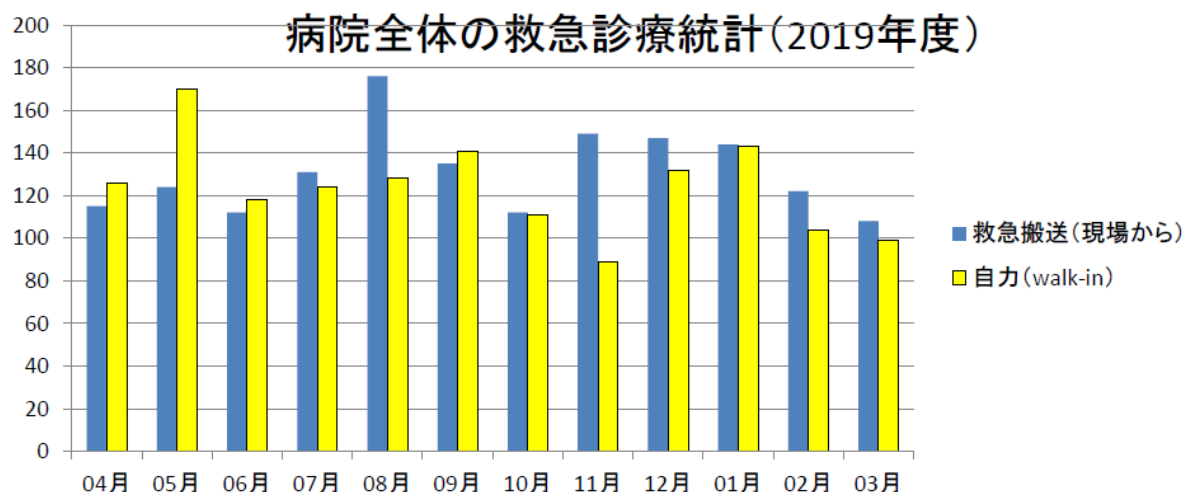


図1. 月別の救急患者数

年間の救急患者数総数は3,082人で、うち転院搬送(7人)を含む救急搬送が1,582人(51.3%)、自力受診(walk-in)1,485人(48.2%)であった。これは病院全体ののべ受診患者数105,067人の2.9%を占めていた。前年に比べ救急搬送は1,668人(53.5%)から2.2ポイントの減少、自力受診は前年の1,449人(46.5%)から1.7ポイント増加した。

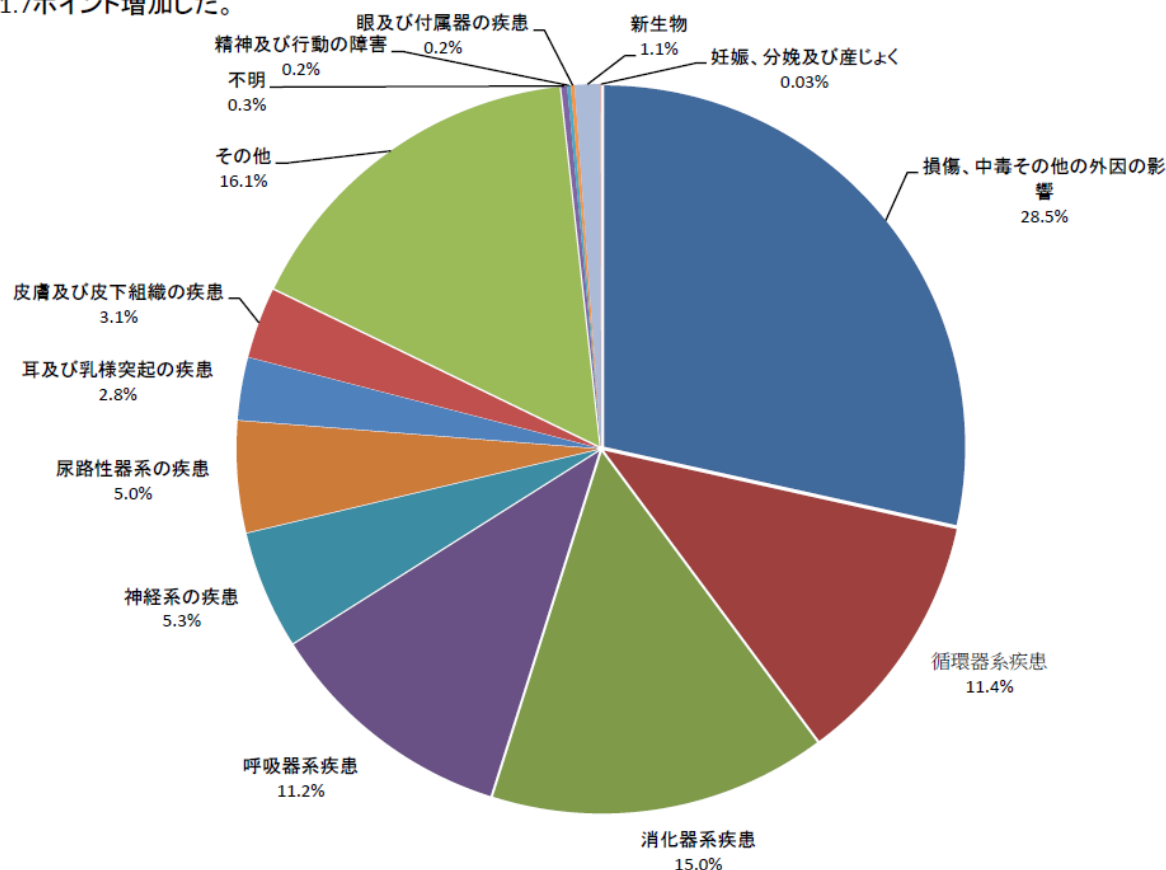


図2. 傷病別の救急患者数(年間)

年間の救急患者数は損傷・中毒その他の外因の影響が最も多く878人(28.5%)で前年1,021人(32.7%)から4.2ポイントの減、続いて消化器系疾患463人(15.0%)が前年467人(15.0%)と比べポイントは変わらず、循環器系疾患が350人(11.4%)で前年399人(12.8%)から1.4ポイントの減であった。傷病別で多い順は7番目まで前年と同じであった。

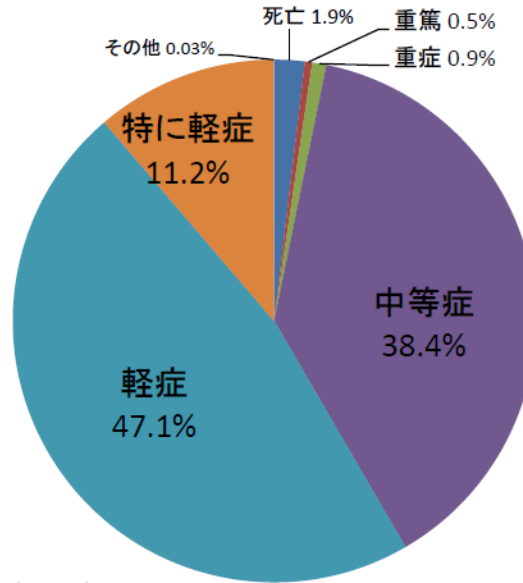


図3. 症状の程度別

年間救急患者全体で、死亡は58人(1.9%)、

重症(重篤を含む)41人(1.4%)、中等症1,184人(38.4%)、軽症(特に軽症を含む)は1,797人(58.3%)であった。

死亡患者の比率は前年の72人(2.3%)より0.4ポイント減少し、重症(重篤を含む)患者の比率は前年の27人(0.8%)より0.6ポイントの増、中等症は前年1,198人(38.4%)より14人減少だがポイントは同じ、軽症患者(特に軽症を含む)は前年1,820人(58.4%)から0.1ポイントの減であった。

救急搬送患者のみを取り上げると、死亡は56人(3.5%)、重症(重篤を含む)39人(2.5%)、中等症788人(49.8%)、軽症(特に軽症を含む)は699人(44.2%)を占めた。前年に比べ、死亡70人(4.2%)から0.7%の減、重症25人(1.5%)から1.0ポイント増、中等症834人(50.0%)から0.2ポイント減、軽症739人(44.3%)から0.1ポイントの減であった。

自力受診患者では、死亡は自宅での看取り2名を除くと0人、重症(重篤を含む)2人(0.1%)、中等症396人(26.4%)、軽症(特に軽症を含む)は1,099人(73.3%)を占めていた。前年と比較すると、重症(重篤を含む)は2人で変わらず、中等症が364人(25.1%)から1.3ポイント増、軽症(特に軽症を含む)が1,081人(74.5%)から1.2ポイントの増であった。

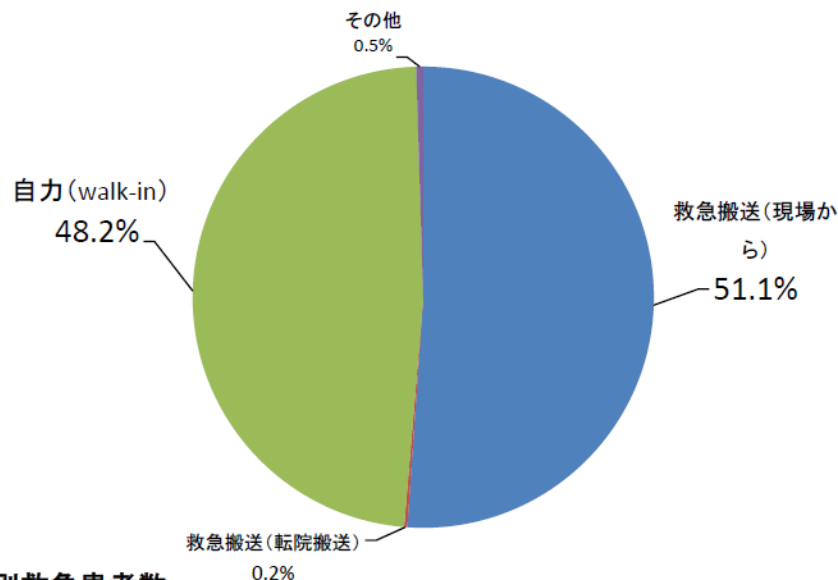


図4. 来院方法別救急患者数

現場からの救急搬送が1,575人(51.1%)、他院からの転院搬送が7人(0.2%)、自力受診(walk-in)が1,485人(48.2%)を占めていた。前年に比べ転院を含む救急搬送は1,668人(53.5%)から2.4ポイント減で、自力受診が1,449人(46.5%)から1.7ポイントの増であった。

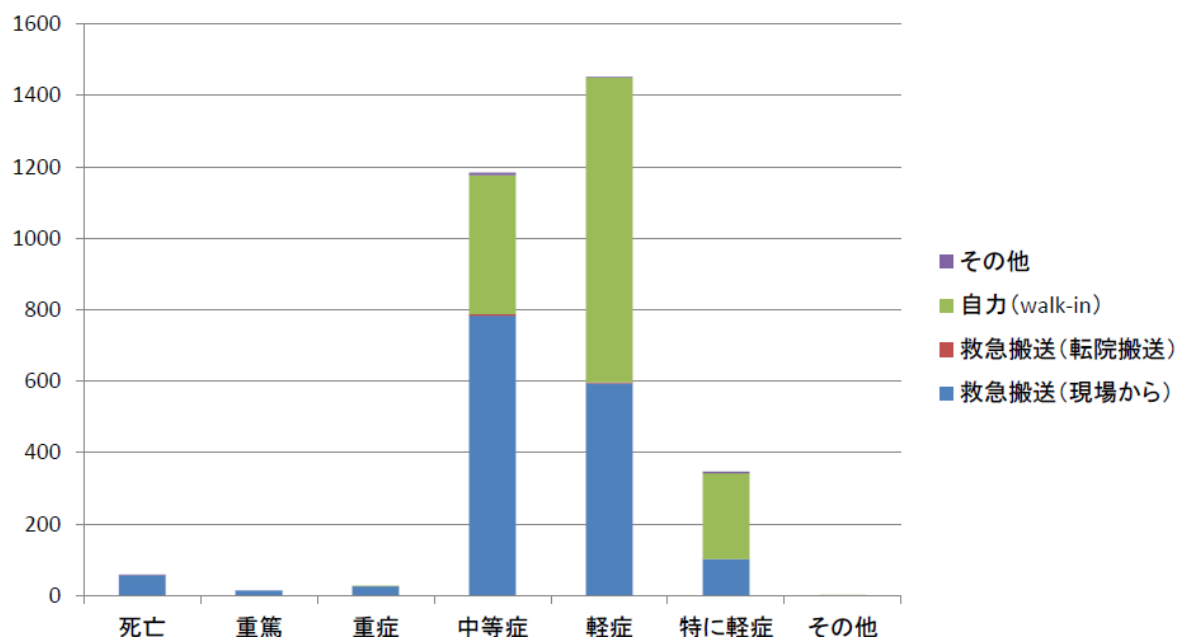


図5. 各重症度の患者の来院方法

現場からの救急搬送が1,575人(51.1%)、他院からの転院搬送が7人(0.2%)、自力受診(walk-in)が1,485人(48.2%)を占めていた。前年に比べ転院を含む救急搬送は1,668人(53.5%)から2.4ポイント減で、自力受診が1,449人(46.5%)から1.7ポイントの増であった。

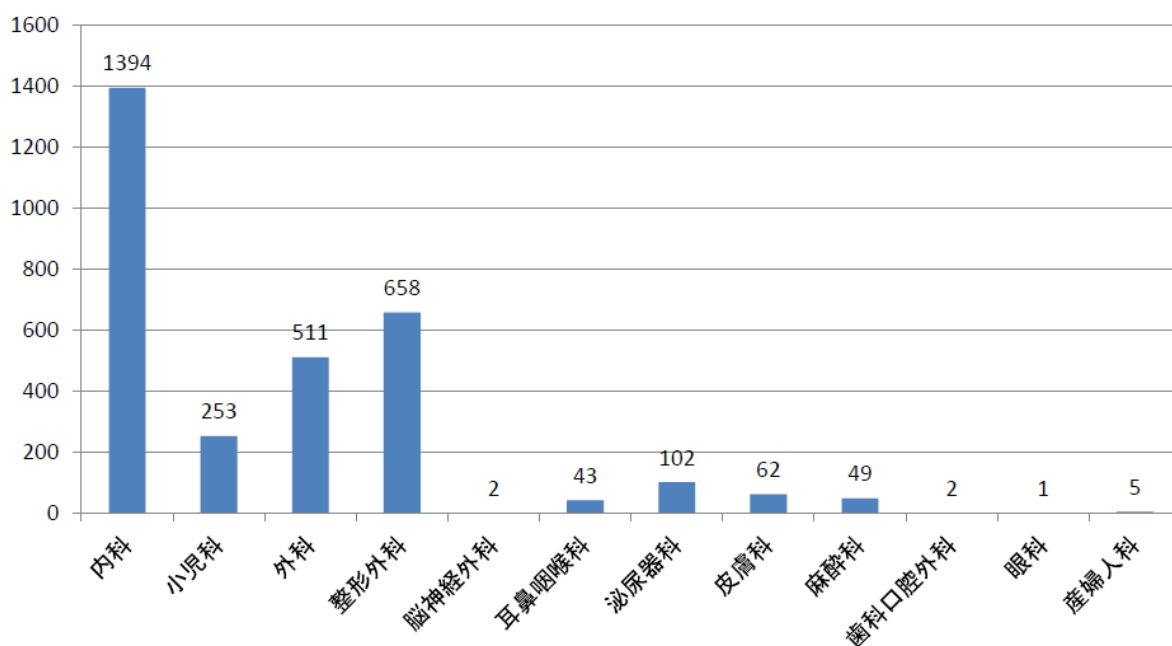
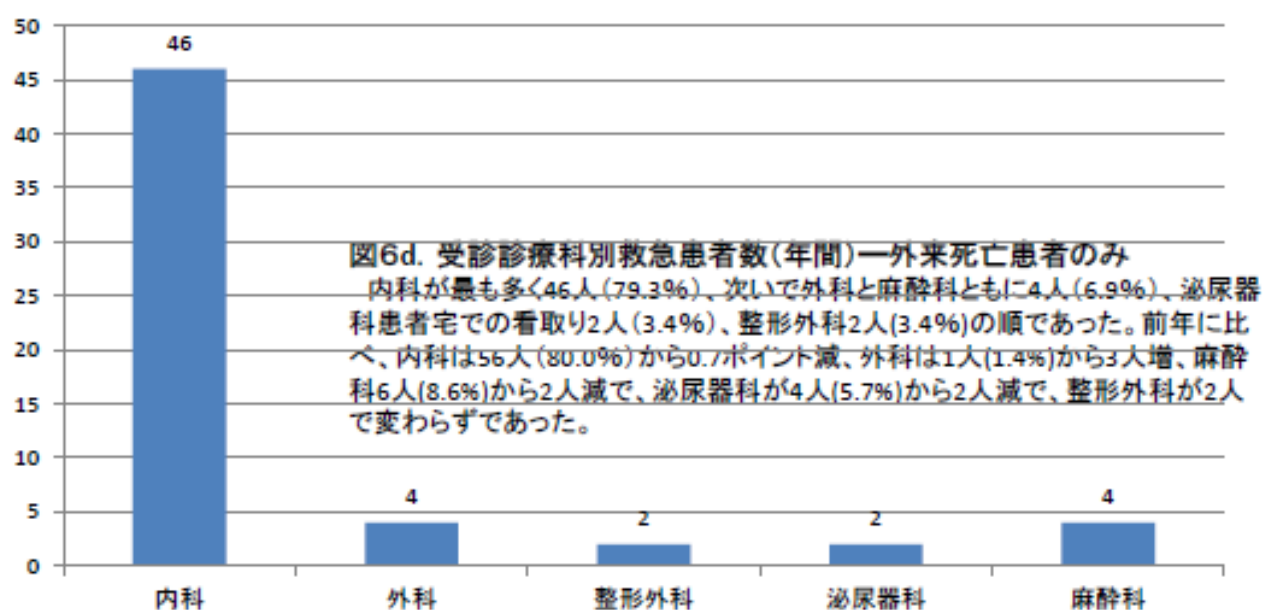
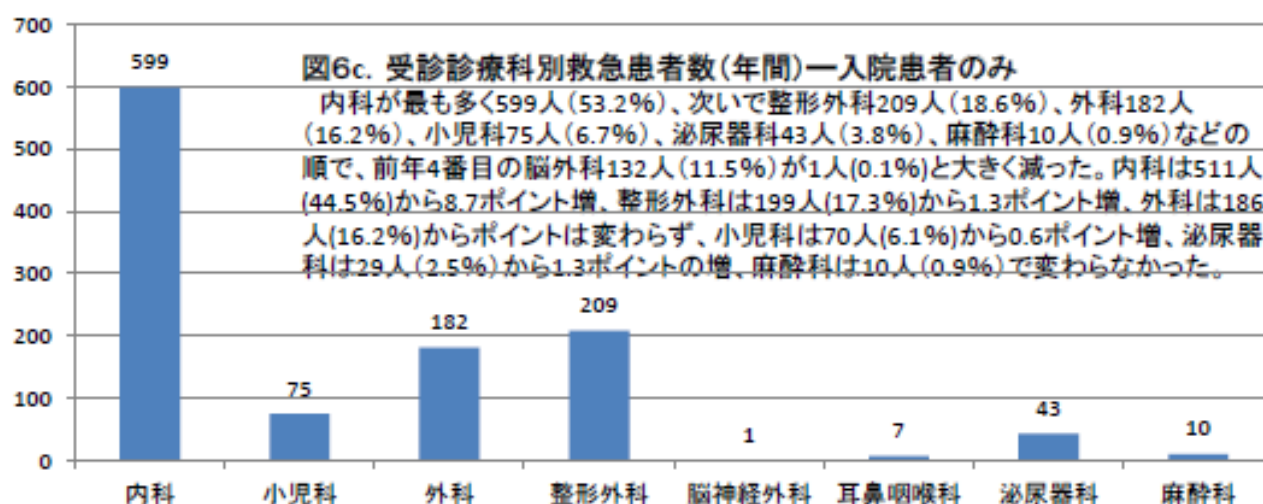
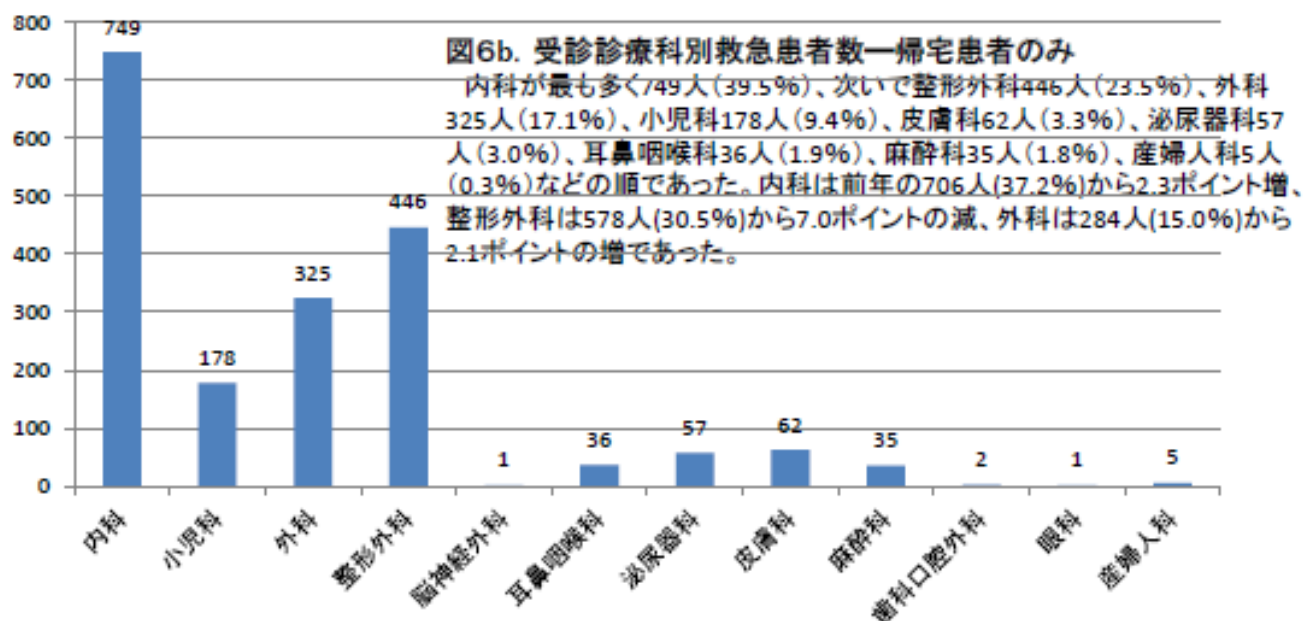


図6a. 受診診療科別救急患者数(年間)―総数

内科が最も多く1,394人(45.2%)、次いで整形外科658人(21.3%)、外科511人(16.6%)、小児科253人(8.2%)、泌尿器科102人(3.3%)、皮膚科62人(2.0%)、麻酔科49人(1.6%)、耳鼻咽喉科43人(1.4%)などの順であった。前年と比べて、内科が1,275人(40.9%)から4.3ポイント減少、整形外科は779人(25.0%)から3.7ポイント減少、外科は471人(15.1%)から1.5ポイント増加していた。また、脳外科常駐医不在で患者が2人(0.1%)となり、前年5番目であった脳外科患者158人(5.1%)から大きく減った。



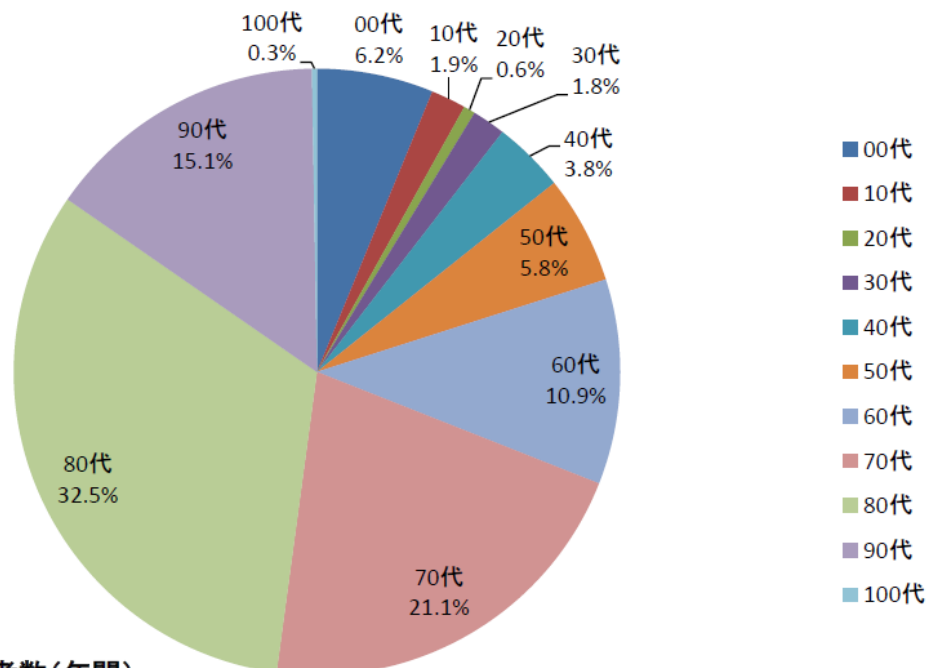


図7. 年齢層別救急患者数(年間)

80代が最も多く366人(32.5%)、次いで70代238人(21.1%)、90代170人(15.1%)、60代123人(10.9%)、0歳代70人(6.2%)、50歳代65人(5.8%)などの順であった。前年と比べると60代165人(14.4%)と90代139人(12.1%)とが入れ替わっていた。

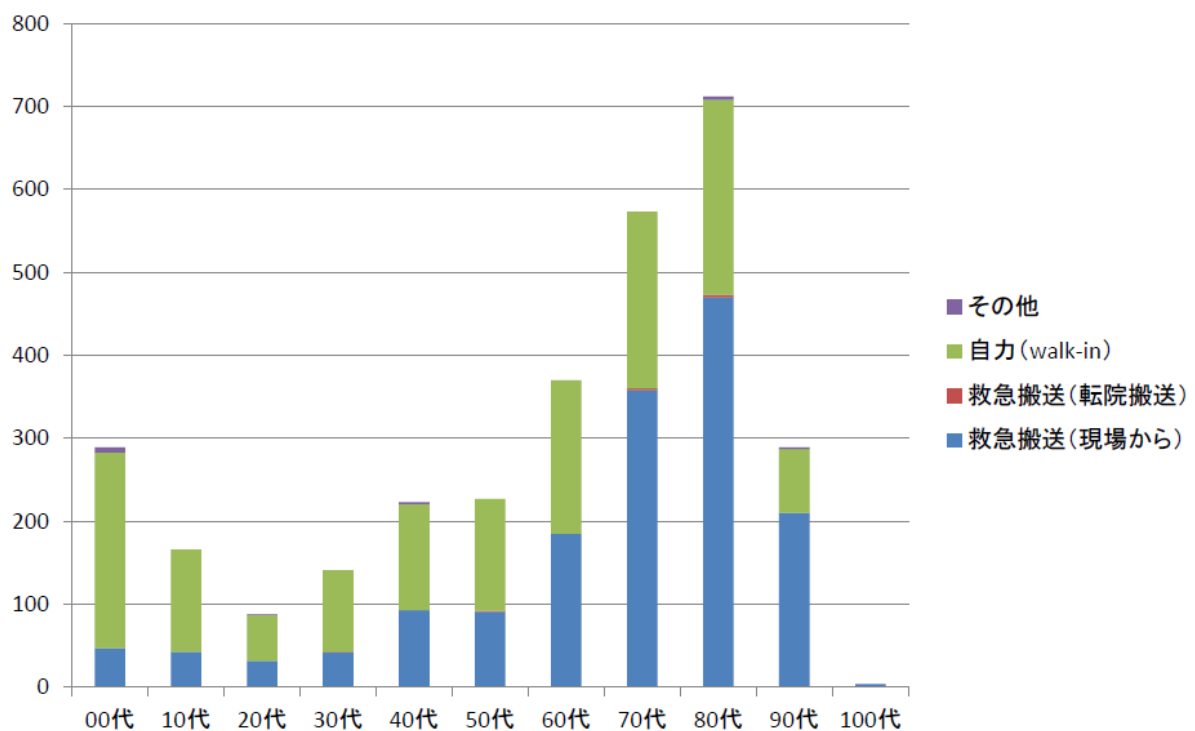


図8a. 患者年代別の来院方法

救急搬送は80歳代473人、自力受診は00歳代236人が最も多かった(80歳代の自力受診は00歳代に次ぐ235人と多かった)。また、100代以上の患者4人は全員救急車搬送であった。これは前年と同じであった。

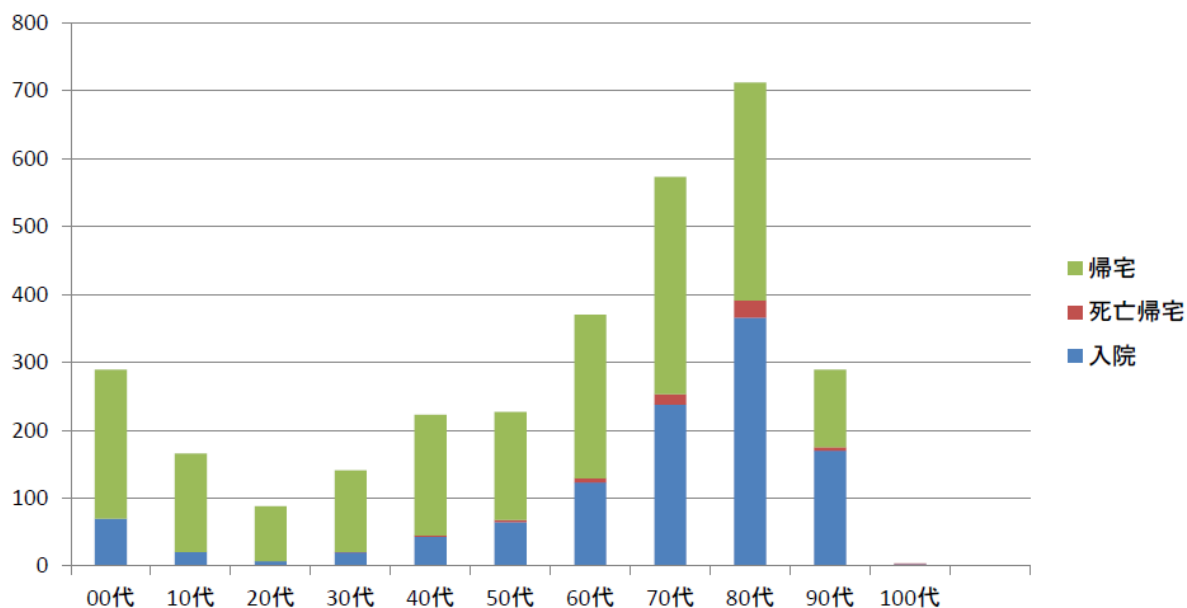


図8b. 患者年代別の入院率、外来死亡率

100代患者は4人搬送後に3人が入院、1人が死亡退院となり、比率では年代ごと入院率・死亡率で最も大きくなった。次に90代が289人中170人(58.8%)、80代が712人中366人(51.4%)と続いた。

外来死亡率は100代に続いて80代が712人中25人(3.5%)、70代が573人中15人(2.6%)、次いで90代の289人中5人(1.7%)であった。

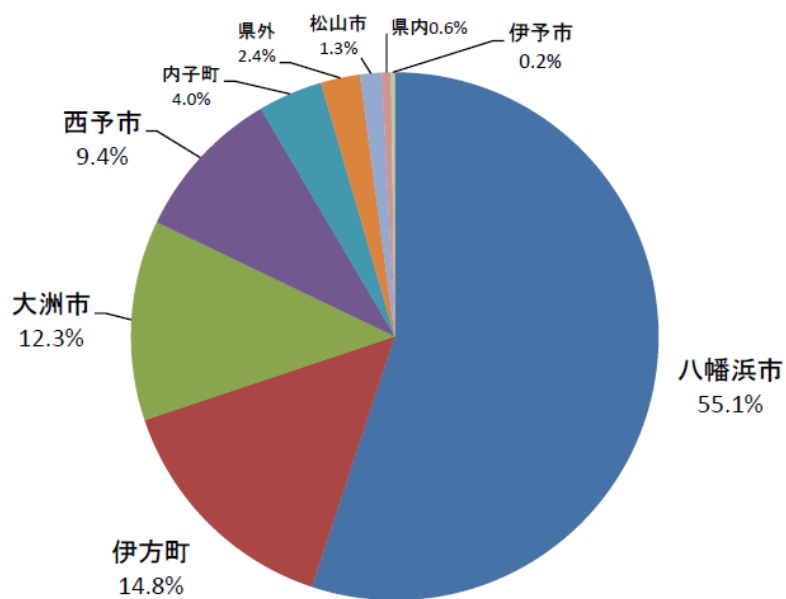


図9. 受診救急患者の居住地

受診救急患者計3,082人の居住地のうち、最も多かったのは八幡浜市で1,698人(55.1%)、次いで伊方町455人(14.8%)、大洲市378人(12.3%)、西予市290人(9.4%)、内子町122人(4.0%)、県外74人(2.4%)などの順であった。前年は八幡浜市で1,891人(60.6%)、伊方町498人(16.0%)、西予市293人(9.4%)、大洲市221人(7.1%)、県外82人(2.6%)、内子町58人(1.9%)で、大洲市5.2ポイント、内子町2.1ポイントの増加がみられた。